公園のさく

「ヤスヒコ、今日も新池公園に集合な。」

ぼくの家の近所にある公園が新池公園だ。放課後にしょっちゅう友達と集まって遊ぶ。シーソーやブランコなどの遊具もおいてあって、小さな子どももよく遊んでいる。うちのとなりの四さいのハルキ君は、ブランコが大のお気に入りで、よく乗っているすがたを見かける。まあ乗り方を教えてあげたのはぼくなんだけどね。

家に帰って、カードを持って急いで公園に行った。すでにヒデオは着いていて、ぼくを待っていた。

「おそいで、ヤスヒコ。早く始めよう。」

さっそくぼくたちはカードゲームを始めた。最近、はやっているんだ。ゲームをしながらブランコの方を見ると、今日もハルキ君が来ているのが見えた。こっちを見て手をふってる。ぼくも手をふり返した。

ひとしきりゲームをしたぼくたちは、休けい場所に行くことにした。休けい場所というのは、ぼくたちだけのひみつの場所で、実は公園と新池との間のさくの上なんだ。さくの上にこしかけると、新池からのすずしい風がふいてきて気持ちがいい。いちおう、「あぶないので登ってはいけません」と書いてあるんだけどね。そんなに高くもないし、乗りこえて池に入ってるわけでもないから大じょうぶ。

「あ、おつかいをたのまれてたのわすれてた。もう帰らないと。バイバイ、ヒデオ。また明日も来ような。」

おつかいをすませてぼくが家でテレビを見ていると、仕事を終えたお母さんが帰ってきた。

「おかえり、お母さん。」

「ヤスヒコ、大変や。おとなりのハルキ君が公園でけがして救急車で病院に行ったで。」

え。ぼくはドキッとした。ついさっきまでハルキ君、元気に遊んでたのに。

「ハルキ君、新池のところのさくから落ちて頭を打ったらしいわ。なんであんなさくの所なんかに行ったんやろ。」

まさか。ハルキ君……。

「ヤスヒコ、どうしたの。何もしゃべらないで。」

お母さんが、じっとだまっているぼくを見て言った。

「……お母さん……ぼく……。」

○　さくの上にこしかけて休けいすることを、ヤスヒコはどう考えていたでしょう。

○　ハルキ君のけがのことを聞いたヤスヒコは、どんなことを考えたでしょう。